

THE DAILY JESUS NEWS

An ATJ Ministries Publication by John Wright

デイリー・ジーザス・ニュース #341

イエスの復活と永遠の宣教

40日間にわたるイエスの復活の出現がさらに6回

奇跡35：イエスの7回目の復活の出現、パート1

イエスはガリラヤ湖畔で七人の弟子たちに朝食を振る舞う

ヨハネ21:1-14

=====

1その後、イエスはガリラヤ湖畔で再び弟子たちに御自身を現された。それは次のようであつた。2シモン・ペテロ、トマス（デディモとも呼ばれる）、ガリラヤのカナ出身のナタナエル、ゼベダイの子たち、そしてほかの二人の弟子たちが一緒にいた。

3シモン・ペテロが弟子たちに「私は漁に出かけます」と言うと、弟子たちは「私たちも一緒に行きましょう」と言った。そこで弟子たちは出かけて舟に乗り込んだが、その晩は何も取れなかつた。

4朝早く、イエスは岸に立っておられたが、弟子たちはそれがイエスだとは分からなかつた。

5イエスは彼らに呼びかけて言われた。」*子どもたちよ、焼いた魚はないのか。」*

」いいえ」と彼らは答えました。

6イエスは言われた。」*舟の右側に網を投げなさい。そうすれば、何か取れるだろう。」*

とき、魚が多すぎて網を引き上げることができませんでした。

7すると、イエスが愛しておられた弟子がペテロに言った。」*主だ。」*

」*主だ*」と言われたとき、上着を脱いでいたので、それをまとめて水に飛び込んだ。8他の弟子たちも、魚のいっぱい入った網を引いている小舟に乗ってその後を追った。岸からそれほど遠くない、百ヤードほどのところにいたからである。

9彼らが陸に上ると、そこに炭火の燃える火があり、その上に魚とパンが置いてあつた。10イエスは彼らに言われた。」**今とつた魚を少し持つて来なさい。**」

11そこでシモン・ペテロは急いで舟に戻り、網を岸に引き上げた。網は153匹もの大きな魚でいっぱいだったが、それほど多かったにもかかわらず、網は破れなかった。12イエスは彼らに言われた。

」**今すぐ来て朝食をとるように命じます。**」

弟子たちのうち、だれもイエスに「あなたはどなたですか」と尋ねる勇気がなかった。彼らはそれが主であると知っていた。13イエスは来て、パンを取り、弟子たちに与え、また、魚も同じようにされた。

14ヨハネの福音書によれば、イエスが死人の中から復活した後、弟子たちに現れたのはこれで三度目である。

=====

注: 私たちは「混合テキスト」の原典福音書を次のように上付き文字で識別します: マタイ =^{MT}、マーク =^M、ルカ =^L、ヨハネ =^J、使徒行伝 =^A。この「上付きID」は引用文の冒頭に挿入され、別の上付き文字が現れるまでその聖書書を識別します。さらに、**赤いイタリック体はイエスの言葉を示します。** 旧約聖書の引用は大文字で書かれています。

コンテキストダイジェスト	
位置	ガリラヤ湖畔
タイムライン	4月 (39ヶ月目)
イエスの生涯の文脈	第9段階：イエスの復活と永遠の宣教 イエスの復活と40日間の宣教
	40日間にわたるイエスの復活の6回の出現
タイトル：	奇跡35：イエスの7回目の復活の出現、パート1

イエスの7回目の復活の出現は、11回の出現の中で最も詳細な記述（全部で24節）が与えられました。ヨハネはこれを2つの部分に分けて記しているため、この1回の出現を2つのDJN聖書朗読で取り上げます。今日の朗読は、イエスがガリラヤ湖畔で7人の弟子たちに朝食を出された様子を描写

しています。イエスはこれを、出現の2番目の部分でペテロを公に宣教に復帰させる準備として行いました。

今日の朗読は、イエスが死んで復活し、私たちに与えてくださった交わりを強調しています。これは、イエスとの一連の認識場面から成るヨハネ福音書の中で、おそらく最も典型的な「認識場面」と言えるでしょう。

この福音書の中で、イエスは主に個人に、時には集団にご自身を啓示されます。そして人々は信仰によって応答し、イエスが神人であることを認識するようになるか、あるいはその啓示を拒絶し、不信と拒絶の態度を続けるかのどちらかです。最初の五人の弟子たち（ヨハネ1-2章）、ニコデモとの会話（ヨハネ3章）、井戸端のサマリア人女性（ヨハネ4章）、麻痺した男の癒し（ヨハネ5章）、五千人の食事と「命のパン」の説教（ヨハネ6章）、仮庵の祭りにおけるイエスの宣教（ヨハネ7-8章）、盲人の癒し（ヨハネ9章）、そしてラザロの復活（ヨハネ11章）は、この福音書における四つの復活の出現と同様に、すべて認識の場面です。

この出現は、7人の弟子たち（うち5人は使徒）が、ガリラヤ湖畔に立っていた復活したイエスに気づかなかったことから始まります。イエスはそこから100メートルほど離れたところにおられ、エルサレムで彼らに最後に現れてから（6番目）、ある程度の時間が経過していたため、これは驚くべきことではありません。彼らはイエスの命令に従い、イエスが彼らと会うと約束していたガリラヤへ戻っていました。ペテロは、イエスの再臨を待つ間、漁業に戻ることに決めていました。

男たちは岸辺にいるイエスをすぐには認識できなかったが、主はペテロの考えを完全に知っていたので、自分の僕を見つけることができる正確な場所に行き、ペテロと個人的に会ったときにエルサレムで始めた修復を完了した（出現#4）。

イエスは、弟子たちが夜通し漁をしたが何も獲れなかつたことを思い出させるような質問をすることで、この出現を始めました。これは重要なことでした。なぜなら、2年半前、イエスがガリラヤでペテロ、アンデレ、ヤコブ、ヨハネを弟子として召された時と全く同じ状況だったからです。（マタイ4:18-22; ルカ5:1-11）イエスがこの場面を再現したのは、ペテロと他の弟子たちにとって、イエスとの関係の根底にあった恵みを思い出すことが重要だったからです。イエスの恵みは何も変わっていませんでした。

イエスは以前と同じように（ルカ5:1-11）、今度は船の反対側で網を下ろすように男たちに命じました。昼間に網で漁をする人は誰もいませんでした。万物の主であり、海の魚を支配しているのでない限り、これはとんでもない命令でした。彼らが網を下ろすとすぐに、大量の魚が彼らの

ところへ向かってきて、最終的に153匹が捕まりました。これは、イエスが彼らに最初に与えた呼びかけを完璧に再現した奇跡でした。

いつものように、最初にイエスだと気づいたのはヨハネでした。岸辺でイエスを見たからではなく、イエスの言葉とを行いに敏感だったからです。この奇跡にはイエスの特質がはっきりと表れていたため、ヨハネは「主だ」と言いました。今、ヨハネが復活したイエスを実際に見ることなく認識した場面が二度目に見られます。イエスがヨハネを深く愛していたのも不思議ではありません。

物語はここでペテロに焦点を移します。使徒たちの中では頭の回転が速いとは言えませんでしたが、主への情熱は揺るぎませんでした。この箇所には、ペテロの態度を垣間見ることができる二つの場面があり、イエスを愛し仕えるという彼の熱意が垣間見えます。まず、ヨハネから岸にイエスがいると聞いた途端、ペテロは水に飛び込み、まっすぐイエスのもとへ泳ぎました。ペテロは魚釣りをするために湖へ行ったのですが、イエスが現れた途端、魚のことなどどうでも良くなりました。その後、ペテロはイエスとの親密な交わりに浸り、他の者たちは膨らんだ網を岸まで引きずり上げました。

対照的に、イエスが、彼らが捕まえた魚を少し持ってきて、自分の魚と一緒に料理するようにと命じた時、真っ先に船に飛び乗り、網を岸まで引き上げたのはペテロでした。するとペテロは突然、再び魚のことを気にかけるようになりました。今度は、それが主の命令だったからです。この二つの行動に、主に仕えるという彼の情熱が見て取れます。

残りの箇所はすべて交わりについてです。イエスはご自身の魚とパンを持参し、ご自身で起こした炭火で焼かれました。しかし、イエスは人々に奇跡的に与えた魚を惜しみなく加えてくださいました。これは、約60年後にラオデキアの教会に語られたイエスご自身の言葉の美しい描写です。

「見よ、わたしは戸口に立って、たたいている。だれでもわたしの声を聞いて戸を開けるなら、わたしは彼のところに入つて彼と食事をし、彼もわたしと食事をするであろう。」黙示録3章20節

彼らはイエスが用意した食事を共にするよう招かれましたが、イエスは彼らの魚も分け与え、彼らの食料も分け与えました。これは真の交わりの象徴です。イエスはご自身が持つすべてを私たちと分かち合い、私たちの人生におけるあらゆること—良いことも悪いことも—を分かち合うほどに優しく謙虚な方でした。

これは双方向の交わりと愛です。イエスがガリラヤ湖畔で人々に示してくださったのもまさにこれです。イエスは亡くなる前の晩に彼らの足を洗われました。そして今、復活後、朝食を用意して彼らにお出しになりました。愛は仕えるものであり、決して止まることはできません。

ペテロと他の弟子たちにできることは、イエスの愛ある奉仕を受け入れることだけでした。それは彼らが今まで食べた中で最高の食事でした！

応用：

復活したイエスは、私たちに対する言葉と行いによって見分けられます。それらはすべて完全な愛の表現です。 「イエスは昨日も、今日も、そして永遠に変わることなく、変わることなく。」

イエスが生きて私たちと共におられることを認めるとき、私たちはイエスと交わりを持ちます。イエスはご自身の豊かさをすべて惜しみなく私たちと分かち合うことを決してやめません。また、愛をもって身を低くし、私たちの経験のすべてを私たちと分かち合ってくださいます。

これが三位一体との交わりの本質です。つまり、私たちが神の御靈を通して神の言葉と資源に頼りながら、神の御前で経験するすべてのことを共に処理する、オープンで終わりのないコミュニケーションです。

イエスは私たちを愛しているからこそ、私たちと永遠に交わるために死からよみがえられました。

あなたは今日、三位一体との絶え間ない交わりをどのように培い、発展させますか。